	初等部だより　５月号	鎌倉女子大学初等部 令和７年４月３０日 第 ２ 号

出会いの春を振り返って

部　長　　大塚 俊明

新年度が始まり、早くも一ヶ月が経とうとしています。私にとってはめまぐるしい毎日の連続でしたが、うれしい出会いもたくさんありました。

先ずは何と言っても、子どもたちとの出会いです。私にとっても、久しぶりの小学校教育の現場。毎日の子どもたちとの触れ合い一つひとつが新鮮で、心躍る日々を送っています。新学期が始まって以来、できるだけ教室を回ろうと心がけていますが、子どもたちの笑顔は、私の何よりの活力源であるとつくづく感じます。

【 １年生　運動会の練習 】

各学級を回って感心するのは、初等部の子どもたちが大変落ち着いた姿勢で学習に取り組んでいる様子です。１年生であっても集中して先生のお話を聞き、様々な活動に意欲的に参加しています。子どもたちには、主体的な学び手としてのよき習慣がしっかり根付いています。「習慣の形成」は学校教育が目標とすべき柱の一つであると、私は常々考えてきました。建学の精神に基づいた明確な子ども像と、それを実現しようとする日々の指導の成果であると感じました。

１６日には、全体保護者会の場で多くの保護者の皆様とお会いすることができました。私事で恐縮ですが、教員時代の教え子との思いもよらぬ再会もありました。まるで時が一気にあの頃へと引き戻されたような教師ならではのうれしい出会いでした。

全体保護者会では、私が私淑している方から教えていただいた「芋こじ」という言葉をご紹介させていただきました。

「芋こじ」とは、桶の中にサトイモと水を入れ、そこに長い板を差し入れてこじることで、里芋の皮をむく方法です。桶の中で芋同士がぶつかり合いながら、どの芋も傷つくことなく、きれいに皮がむけていきます。この様子から転じて、人と人とが対話や話し合いを通して、互いに磨き合う教育のあり方を指す言葉として使われるようになりました。

この「芋こじ」を学校教育に重ね合わせると、桶は教室や学校という空間、芋は一人ひとりの子どもたち、そして長い板は私たち指導者です。板（教師）が直接芋（子ども）をこするのではなく、板によって動いた芋同士が自然にこすれ合い、互いを磨き高め合う―これが「芋こじ」の学びの姿です。

このような学習は、一人ひとりの疑問や問題意識を大切にし、対話や話し合いを通して自分の考えを深めていくものです。人間は誰しも良さを持っている存在です。それを互いに見つけ、認め合い、磨き合っていく場こそが授業だと考えています。

その過程では、「Ａさんはすごい考えを持っているな」とか「Ｂさんには意外にやさしい一面があるぞ」といった発見もあります。また、自分の考えを見直すきっかけにもなります。そうした桶（教室）の中で、子どもたちが互いを尊重し合う関係性を育てていきたいと思っています。

風薫る５月を迎えます。５月には、子どもたちが楽しみにしている運動会が控えています。運動会は、子どもたちの自主性や協働性が発揮される絶好の機会です。一人ひとりがさらに自分を磨き上げ、大きく成長してくれることを期待しています。